

<研究ノート>

## ケアの与え手に必要な心理的要因について ジェネラティヴィティを支えるもの

Psychological factors that care providers need : What supports generativity

串崎 幸代<sup>1</sup>

### 要 旨

Eriksonは成人中期の心理社会的危機としてジェネラティヴィティをあげているが、本稿では、その概念の中核をなす生み出し育てる営みを遂行し質の高いケアを提供するためにはどのような資質が必要かについて考察した。まず、生み育てることと関連が深い「養護性」「親性・次世代育成性」「親準備性・親性準備性」について文献研究を行い、次に、ケアという営みそのものもつ本質的なあり方について考察した。最後に、これまで調査研究で扱われてきた「ケアの対象への親和的関心」や「ケア役割観」などにはおさまりきれない心理的要因について指摘した。

キーワード：ジェネラティヴィティ，ケア，心理的要因，養護性，親性  
generativity, care, psychological factors, nurturance, parenthood

### 1 はじめに

筆者は、ジェネラティヴィティの概念を手がかりに、人を育てる営みがどのような体験であり、その人の人生にとってどのような意味があるのかに関心を持ち、研究してきた<sup>1) 2) 3)</sup>。次世代を健全に育てることは、いまを生きる者にとって果たすべき責務であり、その資質を身につけさせることがいつの時代においても重要な教育的課題の一つとされている<sup>4)</sup>。しかし、育児不安や児童虐待など子育てにまつわる様々な困難が報告されているように、育てる立場になったからといってスムーズにその役割を果たせるわけではない。このことから、育てるという役割を担うにはそのための「資質」が必要であると考えられるようになり、「親となるための教育」が臨時教育審議会答申<sup>5)</sup>でとりあげられたことにも後押しされて、その「資質」を高めるための準備的な教育について研究が進められてきた<sup>6)</sup>。

本稿では、上記にまつわる研究も含め、生み出し育てる営みを遂行し質の高いケアを提供するための土台となるものについて文献研究を行い、これまで注目されてきたケアの与え手の「対象への親和的関心」や「ケア役割観」などにはおさまりきれない、

心理的・人格的な側面について考察する。

### 2 ジェネラティヴィティ 対 停滞・自己陶醉

Eriksonは人間の一生を8段階に分け、それぞれの時期に固有の葛藤を「人間の成長を健康なパーソナリティがさらされる内外の葛藤という観点」<sup>7)</sup>から発達的な危機として提示し、発達段階を個体発達分化の図式 (Epigenetic Schema) に表した。Eriksonは、われわれがこれらの危機を解決していくことがその時期の発達的な課題であると考え、これらの危機に取り組む中で人格的活力 (徳virtue) を獲得することができるとした。

Eriksonはこのような成人期の危機として「ジェネラティヴィティ 対 停滞・自己陶醉」をあげ、この危機に取り組む中で、ケア (世話やはぐくみと訳される) という人格的力が得られるとした。ジェネラティヴィティは、Eriksonによる造語とされ、生殖性・世代性・世代継承性など様々に訳されてきたが、定まった日本語の訳後はまだみられない。それは「愛や必要のため、また、偶然によって生み出されたものへの拡がる関心」<sup>8)</sup>であり、次の世代の確立と指導に対する興味・関心である。ジェネラ

1 Yukiyo KUSHIZAKI 千里金蘭大学生生活科学部児童学科

受理日：2013年10月15日

ティヴィティが発揮されるのは、単に生み出すことを通してではなく、生み出したものを責任を持ってはぐくんでいく場合である。それは「人が行うものや作るもの、あるいは人が一部に加わっているもの、などすべてを世話するという行動をも含」<sup>9)</sup>む。たとえば子どもを産まなくても、後輩や若手の養育や、文化的遺産の創造や継承、さらには新しい世代のためにより良い社会を建設する行為に献身的に貢献することによって、自分の創造性や生産性を社会や次の世代のために発揮できるのである。

この時期の不適應は、相手に対する世話の過剰な拡大と能力を超えた関心とである。ジェネラティヴィティが発達し得ない場合には偽りの親密さへの強迫的な要求への退行が起り、しばしば停滞の感覚の浸透と人間関係の貧困化を経験し、自分本位な状態やケアの対象ではなく自分自身を甘やかす自己耽溺に陥るといふ。

生み出したものを育み継続的にケアしてジェネラティヴィティを発揮することは、たやすいことではないだろう。そのためには何が必要であるのかについて、以下に考えていく。

### 3 ジェネラティヴィティを支えるもの

#### (1) これまでに発達させてきた人格的側面

Eriksonは、以下のように述べ、これまで発達させてきた強さが次世代を育むために不可欠であると述べている。

生殖性対停滞という対立命題から現れる新たな「徳」、つまり「世話」は、これまで大切に (care for) してきた人や物や観念の面倒を見る (take care of) ことへの、より広汎な関与である。良く見れば、乳児期から前成人期に至るこれまでの発達過程で順次生まれてきた強さ (希望と意志、目的と技術、忠誠と愛) は、次の世代の強さを育むという、この世代継承的課題に全て必要不可欠なものであることが明らかになる<sup>10)</sup>。

斎藤らは、ジェネラティヴィティが次世代育成力の中核をなすものと考え、Eriksonの以上の指摘から「全体のバランスのとれた人格の成熟が、次世代を育成しようとする力を生み出す」と仮定した。人格成熟の指標としてEPSI (エリクソン心理社会的段階目録検査) を用いて次世代育成力との関連を調

べたところ、仮説が支持され、次世代育成力には前成人期までの人間生活そのものの「蓄え」が大切であることが示唆された<sup>11)</sup>。

Eriksonの指摘どおり、これまでの発達のプロセスの中で培ってきた適応的な人格が、ケアを行うことの土台となっていると推測される。

#### (2) ケア役割を担うための資質

ここでは、ケアの与え手として必要とされる資質について考えるために、「養護性」、「親性・次世代育成性」、「親準備性・親性準備性」の概念に注目する。

##### ・養護性

Eriksonによるジェネラティヴィティの解説では、ケアの主体を親や親世代に限定せず、またケアの対象を子どもや子ども世代に限定している訳ではない。このような、広い意味で相手を育てることを捉えた概念に「養護性 (nurturance)」が挙げられる。

養護性はFogelら<sup>12)</sup>が理論化したnurturanceを、小嶋が「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」<sup>13)</sup>として日本に紹介したものである。養護性が発揮される対象は、子どもに限らず、障害を持つ人や一時的に有能性を失っている人、ペットや動植物など、継続的な世話が必要であり発達の可能性がある対象すべてが含まれる。

養護性の特徴は「慈しみ育てる」視点である。榊澤は、栄養・支援・励ましなどを提供することなどを通して、相手にとって今必要なものを援助するとともに、「その際相手が自分の行為によってどう発達していくかという視点」も含む概念であるとしている<sup>14)</sup>。Ahlbergらは、養護性は親の愛情、共感、柔軟さ、子どもと快く経験を共にすることなどであり、子どもをコントロールすることや自己犠牲的に過剰に保護することと対極をなすものであるとしている<sup>15)</sup>。女子青年を対象とした養護性に関する研究では、養護性の構成因子は「赤ん坊・子どもへの興味」「子どもをうまく扱える自信」「積極的な養育的役割の受容」であるとされている<sup>16)</sup>。

養護性は子どもの頃から存在し、子ども時代からの長い経験を通して生涯にわたって発達していくものであり<sup>17)</sup>、子どもの頃の共感性や技能 (養護性) が後に「親の子に対する心理」とむすびついていくと考えられている<sup>18)</sup>。無藤ら<sup>19)</sup>は、親になる前に身に着けている養護性の程度は、実際に親になったときの子どもへの敏感さ、子どもに対する応答などと

関連が深いとしている。

・親性と次世代育成力

「親性」や「次世代育成力」は、ケアや育てるということの主体と対象を「親と子」または「親世代と子世代」に限定した概念である。

小笠原<sup>20)</sup>によると、「汐見<sup>21)</sup>によって「親性」が『父親も母親も区別無く、親であることとその立場を自覚し、その役割を正しく遂行すること』と提唱されて以来、親になるために必要とされる能力という視点での研究がなされてきた」という。その後、「親としての仕事や役務、必要な心得を客観的にとらえ、子どもへの関心を持ったうえで、子どもの発達を支援するために状況や子ども自身に応じてそのつど良い対応ができる能力」<sup>22)</sup>、「子どもの基本的欲求を上手に満たしてやる愛情、態度、能力が含まれているだけでなく、夫婦でそれをうまく分担する能力」<sup>23)</sup>と、定義は発展した。さらに、鮫島<sup>24)</sup>は、「親性とは生物的性差を認めたとうえで、両性ともに親になることにより発達する個人の人格的特性」とし、子どもを養護することを保障できるような親としての自己の「強さ・行動力・安定力」という人格的側面について重視している。

昨今は、親になるかならないかにかかわらず次の世代を健全に育てる責務があるという観点から「親性」に替わって「次世代育成力」という用語が用いられることもある。杉山は「わが子あるいは父・母・産む産まないといった関係性にとらわれることなく、子どもの成長・発達を支援する営み」<sup>25)</sup>と定義している。

・親準備性もしくは親性準備性

少子化によって子どもと触れ合うことなく親になる状況や、親自身の自己中心性の高さから、親になってからの子育て支援だけでは不十分であり、親になる以前から親になるための資質を育てる必要があると考えられるようになってきた<sup>26)</sup>。

岡本ら<sup>27)</sup>によれば、親準備性は、子どもに対する親としての役割を遂行するための資質、つまり「養育役割」であり、「情緒的、態度的、知的に親としての役割を果たすために十分なレディネス」や「心理的・行動的・身体的に育児行動を行うために必要な資質を形成していく、あるいは形成された状態」などと定義されてきたという。そして、準備性には、「子どもに関するもの（子どものイメージや

子どもへの関心)」、「子育てに関するもの（親による子育てへの構え、育児観、性、結婚、夫婦の役割・育児についての意識と態度、性の需要など）」「親となることに関するもの（親志向性、母性意識、親への親和性、親への同一化）」という3つの側面があると整理している。

以上から、人を育てるための資質は成人期になって急にたち現れるものではなく、幼少期から育てられていくべきものであると考えられていることがわかる。そして、これまでの研究において、その資質は、主として、「子どもへの関心や親和」「親役割・養育役割を果たすための心構え」「親になることの受容性」「子育ての技術」であるとして研究が進められてきた。

しかし、これらが揃いさえすればケアを実行することができると考えて良いだろうか。小笠原が「子を育てるということは単に育児に必要な授乳やおむつ交換などの手技を取得しているだけでは不十分であり、我が子のありのままを受け入れ、我が子と向き合いながら関わるができるという親自身の精神的な成長が必要であると考えられる」<sup>28)</sup>と述べているように、ケアという営みを成立させるためには、実際にそれを担っていくための人間としての心理的・人格的な力が必要であると思われる。たとえば、榎澤は養護性について、「相手を育てるとは、相手の特性をわかった上で相手の必要なものを与えたり差し出したりする行動と考えられる」<sup>29)</sup>と述べているが、そのためには、相手のことを理解する共感性とともに、相手の必要なものを与える、あるいはあえて与えずにおくといったことを決める主体的な判断力が必要であろう。鮫島<sup>30)</sup>は、前述したように、親性の発達には親としての「自己の強さ・行動力・安定力」が大切であると考えている。

また、世代間比較という観点から親準備性概念の捉え直しを行った中村ら<sup>31)</sup>は、子育てに関する自由記述の調査においては、「責任・自律・誠実さ」や「子どもを一人の人間として尊重する姿勢」「コミュニケーション能力」の重要性を指摘する者が多かったという。

このような、ケアや養育に必要な心理的側面や人格的な力については、養護性や親性、親性準備性などを考える際に若干触れられることがあるものの、正面からとりあげられることは少なかったように思われる。そこで、次に、ケアという行為そのものの



持つ性質についても考えてみる。

### (3) ケアという営みが持つ要素

ケアについて哲学的な考察を行っている Mayeroff は、「ケアの本質」のなかで、ケアの主要素として以下のものをあげている<sup>32)</sup>。

- ・知識：誰かを適切にケアするためには、相手について多くを知らなければならない。また、自分自身の力と限界についての知識も必要である。
- ・リズムを変えること：自分のケアがもたらした結果をみて、ケアの対象とのかかわり方やケアの方法を適切に調整していくこと。
- ・忍耐：相手の状況を尊重するために必要である。忍耐があると、「相手にとってよいときに、相手にそった方法で、相手を成長させることができるのである」。
- ・正直さ：あるがままの相手を見つめるとともに、あるがままの自分をも見つめる心。
- ・信頼：相手が成長していくこと、私のケアする能力の二つを信頼すること。
- ・謙遜：ケアされている人から学び、尊重する謙虚さ。また、自分のケアが特別ではないという自覚。
- ・希望：「私のケアを通して相手が成長していくという希望 (Hope)」
- ・勇気：「相手の進む方向に同行する勇気。新しい未知の領域へと分け入っていくことに対する不安へと向き合うこと」。

メイヤーロフの考察は、実証的な研究からもたらされたものでないが、ケアという行為の全体を包含する示唆深いものであると考えられる。

一方、後藤らは、ケアとは、「世話をする - される」という関係によって成立するが、世話をする代わりに「満足」や「自己実現」を求めるといった交換関係や有用性では価値づけられない非合理的な関係であるとし、合理的判断の前に、手を差し伸べずにはいられない状況の他者に見返りを求めずに応答してしまう贈与の関係であるとしている。そして、人間の「弱さ」への了解が不十分で、見返りを求める交換関係を「親になること」で完遂しようとする、虐待や独善的な「ケア」の暴力的行為へと向かうことになるとしている。『「親になること」を学ぶとは、社会に開かれた存在として『生命』と向き合い『自己』に出会い『他者と共に生きる』ことを学ぶこと

である」<sup>33)</sup>

このように、ケアとは、まずはケアの与え手が自立した人として、ネガティブな感情も含めた自分自身を抱えながらケアの対象である相手にあたたかくよりそい、共感し、相手本位にかかわることを通して行われるものである。ケアを支える心理的な要因には、相手の必要性を読み取る共感性と自分の能力を受け入れる謙虚さ、弱さを抱える相手を自分のために利用しない良心、自分の要求を脇において相手の要求を尊重する自己制御力、相手と自己を信じて希望を持ち続ける力など、広くさまざまな心理的な力が求められるといえる。

## 4 おわりに

これまでみてきたように、慈しみをもって、相手を相手のためになるような方法でケアしていくためには、様々な「強さ」が必要であるといえる。そういった人間としての強さを幼少時から育てていくことが、たとえ、ケアをするという直接的な経験や技能を身につける機会が少なかったとしても、良質なケアを行っていく上での土台となるであろう。とはいえ、もともと完璧な人間がいるわけではない。私たちは、ケアという行為への献身を通して、より成熟・発達していくのであり、そういった意味でケアの与え手と受け手はお互いを必要とし、全く対等なのである。

## 5 文献

- 1) 串崎幸代, 心理臨床学研究, 23 (2), 197-208, (2005)
- 2) 串崎幸代, 心理臨床学研究 23 (5), 591-596, (2005)
- 3) 串崎幸代, 臨床心理研究 - 京都文教大学心理臨床センター紀要, 9, 65-71, (2007)
- 4) 岡野雅子, 信州大学教育学部紀要, 110, 57-67, (2003)
- 5) 臨時教育審議会, 教育改革に関する第二次答申 (昭和61年4月23日), (1986)
- 6) 前掲4)
- 7) Erikson, E.H., identity and the life cycle, International Universities Press. (1959), 小此木啓吾訳編, 『自我同一性 - アイデンティティ

- とライフサイクル』, 誠信書房, (1959)
- 8) 前掲7)
- 9) Erikson, J.M., Erikson, E.H., Kivnik H.Q., Vital involvement in ole age, W.W. Norton, (1986), 朝長正徳・朝長梨枝子訳, 『老年期』, みすず書房, (1990)
- 10) Erikson, E.H, & Joan, E.M., The Life Cycle Completed A Review Expanded Edition, W.W. Norton, (1997), 村瀬孝雄・近藤邦夫訳, 『ライフサイクル、その完結<増補版>』, みすず書房, (2001)
- 11) 斎藤幸子・星山佳治・宮原忍, 「少子社会における次世代育成力に関する調査」, 保健医療科学, 53 (3), 218-227, (2004)
- 12) Fogel, A., Melson, G.F., Mistry, J., Conceptualizing the Determinants of Nurturance: A Reassessment of Sex Differences, In Fogel, A., Melson, G.F. (Eds.): Origins of nurturance, 53-68, Hillsdale, N.J.L. Erlbaum Associates, (1986)
- 13) 小嶋秀夫, 養護性の発達とその意味, 小島秀夫編, 『乳幼児の社会的世界』, 有斐閣選書, 187-204. (1989)
- 14) 糊澤令子, 『青年期・成人期における養護性の発達と形成要因』, 風間書房, (2012)
- 15) Ahlberg, C., Sandnabba, N.K., Parental Nurturance and Identification with own Father and Mother: The Reproduction of Nurturant, Parenting Early Development and Parenting 7, 211-221. (1998)
- 16) 小島秀夫, 「養護性の概念化とその発達過程の推論」, 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 205-206, (1991)
- 17) 前掲13)
- 18) 林昭志, 上田女子短期大学紀要, 28, 11-18, (2005)
- 19) 無藤隆・久保ゆかり・遠藤利彦, 『発達心理学(現代心理学入門2)』, 岩波書店, (1995)
- 20) 小笠原百恵, 関西看護医療大学紀要, 2 (1), 11-21, (2010)
- 21) 汐見稔幸, 星保健情報, 20号, 48-50 (1989)
- 22) 法月泉・金田利子, 日本保育学会退会研究論文集, 50巻, 336-337, (1997)
- 23) 汐見稔幸, 母子保健情報, 36号, 10-13, (1997)
- 24) 鮫島雅子, 鹿児島純心女子大学看護学部紀要, 3巻, 80-92, (1998)
- 25) 杉山智春, 日本看護学会論文集 母性看護 第37回, 104-106, (2006)
- 26) 蘆田智絵, 学習開発研究, 3, 83-90, (2010)
- 27) 岡本祐子・古賀真紀子, 広島大学心理学研究, 4, 159-172, (2004)
- 28) 小笠原百恵, 関西看護医療大学紀要, 2 (1), 11-21, (2010)
- 29) 前掲14)
- 30) 前掲24)
- 31) 中村翔・田原歩美, 福山大学こころの健康相談室紀要, 6 別冊, 27-34, (2012)
- 32) Mayeroff, On Caring, 『ケアの本質』, 田村真訳, ゆみる出版, (1987)
- 33) 後藤さゆり・奥田雄一郎・平岡さつき・呉宣児・大森昭生・前田由美子, 共愛学園前橋国際大学論集, 10, 207-217, (2010)
- 34) 前掲11)
- 35) 前掲33)

